様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０９３５

研究課題名（和文）民族誌を用いた土器型式の動態把握のための理論的研究

研究課題名（英文）The Ethnoarchaeological study on pottery production in PNG for the understanding of Jomon Pottery types.

研究代表者
高橋　龍三郎（Takahashi, Ryuzaburo）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：８０１６３３０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：縄文土器型式の成立過程を、型式的特徴の継承・伝播現象と分布のメカニズムから把握し直し、それをパプアニューギニアの家庭的土器生産の民族誌調査から理論的に再構築することを目的にした。研究期間中、パプアニューギニアのイーストケープ地方とワリ島、セピク川中流域に出張して民族誌調査を実施し、部族社会の製作者に聞き取り調査を行った結果、母親から娘への技術的継承関係が明らかになるとともに、単なる土器製作技術だけではない、製作者の世界観までが製作者のリーダーとしての在り方や型式変化に大きな影響を与えていることを見出した。研究成果に基づいて公開シンポジウムを開催した。

研究成果の概要（英文）：The Ethnoarchaeological study on domestic pottery production in East Cape district and Wari Island as well as Middle Sepik River in Papua New Guinea was curried out during 3 years.The main purpose of the field research was to establish the theoretical framework for the understanding and modeling of Jomon Pottery type by interviewing the way how women potters transmit the technological knowledge and ideas to their daughters,and by studying the patterns of dispersal of the potteries in a areal space in various context.
Not only technological achievement and superiority but also potter's cosmological aspects and religious status are responsible for the establishment of the leading position in pottery production in an area and the determinant factor for stylistic changes in pottery type.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：土器型式　民族誌調査　母娘間の継承　母系制社会　製作技術　分布域　儀礼　精神世界

１．研究開始当初の背景

縄文土器は時間軸と地域軸の二元的なマトリクスの中で「土器型式」を成立させている。それらは縦横の関係で技術上の連鎖がみられ、まったく無秩序に成立するのではない。その根本的な要因は、土器製作に関わる縄文時代の技術的、行動的連鎖の中に解明の糸口が求められる。

縄文式土器の型式が、なぜどのようなメカニズムで生成するのかについては、長い間考古学界の謎とされてきた。型式が前代の基本型を母体にし、新たな要素を加えて変化して成立する実態は多くの研究によって証明され、一定の地理的範囲の中で型式が維持継承されている点も確認されている。しかし、土器型式の諸特徴が一人の作り手を越えて、多くの人々に共有される仕組みや、一定の地理的分布の範囲に製品がもたらされる原因については、未解明の分野であった。長年の研究にもかかわらず、縄文時代研究の根幹であり基盤をなす土器型式成立の実態が不明とは不思議なことであるが、土器型式が成立するメカニズムにこそ、縄文社会を探る糸口が見え隠れする。しかし、型式成立の実態を縄文時代に遡って観察することは不可能である。そこで土器型式成立の過程を、未開社会の民族誌から研究する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の三つに集約される。
①土器型式の諸特徴が正しく継承され一定期間維持されるメカニズムを民族誌的に解明すること。
②土器型式が一定の地理的範囲に分布する社会的背景として、製作者を含む親族組織や婚姻関係、婚後の居住パターンなどの実態が大きな影響を与えている可能性があり、それについて民族誌調査からアプローチすること。
③地域間で異系統土器が交流し、その結果、異系統の要素が模倣され摂取される実態について民族誌調査から有益な示唆を得ること。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために、パプアニューギニアのミルンベイ州イーストケープ地方および東セピク州セピク川中流域に出向いて、土器作りに関する民族誌調査を実施する。それらの地域では伝統的で家庭的使用を目的とする手作りで素焼の土器が長年にわたり製作され続けている。イーストケープ地域は伝統的な母系制社会で、土器製作は女性による重要な仕事とされている。土器製作は女性を通じて継承されるので、技術的伝習がどのようになされるのかを聞き取り調査で明らかにする。また土器製作者の家系図を製作し、親族組織や婚姻、婚後居住類型を明らかにし、土器製作技術の拡散要因を探る。居住規程には、親族構造上のクランやリネージ、その根本となるトーテム等が大きな影響を与えているので、それらを聞き取るとともに、村落などの位置やクランの配置、各家庭の位置などを GPS により正確に記録する。それは土器生産に関する分析研究のすべての基礎をなすものである。セピク川中流域の土器製作については、クウォマ族のミノウ村を訪問し、儀礼的な土器製作について聞き取りを中心に民族誌調査を実施する。

４．研究成果

現地での民族誌調査は 2011 年、2012 年、2013 年の 3 か年にわたり夏季休暇を利用して実施した。

2011 年は 3.11 東日本大震災で研究分担者や協力者に直接の影響が出たために夏場の調査が実施できるか危ぶまれたので、パプアニューギニアの土器製作に関するシンポジウムに切り替えた。復興の進捗状況の様子を見ながら予算調整したため、2011 年度は科研費ではなく大学内研究費によりフィールド調査を実施した。調査はセピク川中流域に出張してクウォマ族のミノウ村を訪問し、アパウ、ワサウ、アウマル等の儀礼的使用を目的にする土器の製作について調査した。

2012 年、2013 年は代表者の高橋、研究分担者の中門は、大学院生を引率してイーストケープのケヒララ・ミッション、トパ・ミッションに 2 週間滞在し、各村落（サブ・クラン）を訪問して、女性土器製作者に面接して聞き取り調査を実施した。従来の聞き取りを加えると、総計 40 名近くの製作者にインタビューしたことになり、土器の実測図の作成とともに、多くのデータを収集した。ケヒララ地区とトパ地区について、クランの配置と各世帯の家屋配置について GPS による記録を継続して実施してきたが、2013 年にはトパ・ミッションで最後まで残されていたバクマニ村の 3 クランの配置と各家庭の家屋の位置を GPS で記録し、これで両地区のすべての計測と記録が終了した。これらのデータは、地図類が皆無であるパプアニューギニアでは、研究上必須のデータであり、これからのすべての研究活動の基礎となるものであった。この間に実測や写真撮影で記録した土器は完形土器で 200 個体を超えた。

イーストケープに持ち運ばれる異系統土器であるワリ式土器の実態を調査するために、2013 年には本島から約 70ｋｍの海上に浮かぶ「ワリ島」に渡航し、現地のクランやサブ・クラン、クランごとのトーテムや系図について聞き取り調査を実施した。また女性の土器製作者に面会し土器製作に関して聞き取り調査を実施した。この島にも地図がないので、島を歩いて GPS で記録しながら、各クランの配置や各家庭の家屋を記録しながら基礎的な作業を行った。製作され村に保存される土器について、写真撮影と実測作業を行い、「ワリ式土器」の標識となる実例について多くの知見を得ることができた。

これらの調査を総合すると、土器製作が女性の手に委ねられているイーストケープ及びワリ島では、母親の持つ土器の文様や製作技術の大部分がその実の娘に継承され、型式の縦方向（時間軸）を決定する上で重要な意味を持っていた。母系制社会では、娘は生家にとどまるが、結婚後に夫方の居住地に移動して生活することも多いので、婚後の居住をめぐる動きが土器製作技術の移転と拡散に影響していること、また土器製作を同じ場所に集まって行う共同製作の慣行も土器型式が他の技術と融合したり、他に拡散する契機となることが判明した。ワリ式土器が本島のイーストケープに大量に搬入され、イーストケープ伝統の技術の中に取り込まれて、両者の間に一種の模倣形態を生じるメカニズムについても、実際の製作者に面会して、事実関係を聞き取った。

セピク川中流域のクウォマ族の儀礼的・祭祀用の土器製作に関しては、単に技術的に優れた製作者というのではなく、むしろ製作者の持つ世界観と宗教上の地位が土器製作の「特権」と関わり、それ以外のものは土器製作に関与できない仕組みが解明された。

５．主な発表論文等

【研究代表者の研究成果】

〔雑誌論文〕（計 22 件）

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（10）」『史観』第 170 冊　pp p98-121　2014 年

高橋龍三郎「パプアニューギニアの土器製作と社会的意味」『アジアの土と炎―民族誌と実験考古学の最前線』pp55-61 2014 年

高橋龍三郎「セピク川中流域の儀礼と霊（spirit）」『天理参考館報』第 26 号　pp7-20 2013 年

高橋龍三郎「発掘調査・管理に必要な専門的能力をどう確保するか」『都市問題』vol.104 pp59-71　2013 年

高橋龍三郎「縄文身体装飾の社会的意味」『縄文時代装身具の考古学』pp59-67 2013 年

高橋龍三郎「縄文社会研究の最前線」『會津八一記念博物館研究紀要』第 15 号　pp 119-127　2014 年

高橋龍三郎「亀ヶ岡式三足土器の新たな事例」『技術と交流の考古学』岡内三眞編 pp145-157 2013 年 3 月　同成社

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（九）」『史観』第 168 冊　pp103-120　2013 年 3 月

高橋龍三郎　「縄文時代における熊谷周辺とその社会　『発掘出土品展記念講座講義録』pp35-49　2012 年 10 月

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇：岩井聖吾「戸ノ内貝塚発掘調査報告」『印西市の歴史』第 6 号 pp33-43 2012 年 2 月

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（八）」『史観』　第 166 冊 pp83-99 2012 年 2 月

高橋龍三郎　「パプアニューギニアの土器製作民族誌から学ぶ」　『パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会　　三大学合同シンポジウム要旨集』　pp1-6　2012 年 2 月

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾・服部智至　「千葉県印西市（旧印旛郡印旛村）戸ノ内貝塚第 7 次発掘調査概報」　『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 57 輯 pp57-82 2012 年 2 月

中門亮太「瘤付土器に見られる刺突・刻目手法に関する一考察」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 15 号　p29-p39　早稲田大学會津八一記念博物館　2014 年 3 月

中門亮太「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」（査読あり）『古代』131 号 p49-p83　早稲田大学考古学会　2013 年 4 月

中門亮太「アベラム族と精霊の関わり」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 14 号　p47-p54　早稲田大学會津八一記念博物館　2013 年 3 月

中門亮太「Malinowski 以後の土器交易網―埼玉県鶴ヶ島市寄贈オセアニア民族造形美術品の紹介に代えて―」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 13 号　p39-p50　早稲田大学會津八一記念博物館　2012 年 3 月

中門亮太「イーストケープ地方の土器生産と交易」『三大学合同シンポジウム　パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会　発表要旨集』　p29-34　早稲田大学考古学研究室 2012 年 2 月

中門亮太「ミルンベイ州ワリ島の土器製作の民族誌」『三大学合同シンポジウム　パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会　発表要旨集』　p17-22　早稲田大学考古学研究室　2012 年 2 月

中門亮太「【シンポジウム報告】考古学と民族学」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 15 号、p128-p133、早稲田大学會津八一記念博物館　2014 年 3 月

中門亮太「【シンポジウム講演録】2011 年度セピック川流域における民族考古学的調査報告―アベラム族の総合的調査―」『天理参考館報』第 26 号、天理大学付属天理参考館、2013 年 10 月

西村広経、中門亮太、冨樫那美、安室一「第 4 章　出土遺物の概要」『月布川流域における縄文時代遺跡の研究 2　山形県西村山郡大江町長畑遺跡第 2 次範囲確認調査概要報告書』長畑遺跡調査団（福田正宏編）、2013 年 1 月

〔学会発表〕（計 12 件）

高橋龍三郎「イアツムル族の移動戦略と社会」『オセアニアの物質文化・民族造形 ～今泉コレクションを中心に ～　』南山大学三大学合同シンポジウム 2014 年

高橋龍三郎「パプアニューギニアの土器製作と社会的意味」『公開シンポジウム　アジアの土と炎―民族誌と実験考古学の最前線』2014 年

高橋龍三郎「縄文身体装飾の社会的意味」『公開シンポジウム　縄文時代装身具の考古学』早稲田大学先史考古学研究所　2013 年
高橋龍三郎「縄文社会の最前線」『早稲田大学文化芸術週間　『シンポジウム　四次元との対話―縄文と現代をつなぐもの』早稲田大学會津八一記念博物館主催　　2014 年
高橋龍三郎　「パプアニューギニアの土器製作民族誌から学ぶ」　『パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会』三大学合同シンポジウム　2011 年 2 月　早稲田大学
高橋龍三郎「セピク川中流域の儀礼と霊（spirit）」　三大学合同シンポジウム 2012 年 11 月　天理ギャラリー
中門亮太「民族誌・民族資料から見た土器の用途・分布論」オセアニアの物質文化・民族造形−通称今泉コレクションを中心に、南山大学、2014 年 3 月 15 日
中門亮太「考古学と民族学」早稲田文化芸術週間 2013 シンポジウム「四次元との対話−縄文と現代をつなぐもの-」、早稲田大学小野記念講堂、2013 年 10 月 26 日
中門亮太「2011 年度セピック川流域における民族考古学的調査報告―アベラム族の総合的調査―」三大学合同シンポジウム　ニューギニアの生活文化と神がみの形、天理ギャラリー、2013 年 3 月 2 日
中門亮太「豊島区の縄文時代」豊島区勤労福祉講座、豊島区民センター、2012 年 5 月 26 日
中門亮太「イーストケープ地方の土器生産と交易」三大学合同シンポジウム　パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会、早稲田大学小野記念講堂、2012 年 2 月 26 日
中門亮太「ミルンベイ州ワリ島の土器製作の民族誌」三大学合同シンポジウム　パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会、早稲田大学小野記念講堂、2012 年 2 月 25 日

〔図書〕（計７件）
（編著）高橋龍三郎『パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会』公開シンポジウム予稿集　全 70 頁　2011 年 2 月　早稲田大学先史考古学研究所
（編著）高橋龍三郎　『縄文時代装身具の考古学』公開シンポジウム予稿集　全 74 頁 2013 年 11 月　早稲田大学先史考古学研究所
（編著）高橋龍三郎『縄文後・晩期社会の研究―千葉県印西市戸ノ内貝塚発掘調査報告書―』全 490 頁　平電子印刷所　2014 年 3 月
中門亮太編『戸ノ内貝塚発掘調査成果報告展−平成の印旛手賀−』早稲田大学會津八一記念博物館　2013 年 11 月
（編著）中門亮太『大久保山―浅見丘陵の土地利用史―』早稲田大学會津八一記念博物館 2012 年 11 月
中門亮太「會津八一コレクション　瓦磚」『最後の文人　會津八一の世界』新潟市會津八一記念館　2012 年 10 月
中門亮太、平原信崇編『埼玉県鶴ヶ島市寄贈オセアニア民族造形美術品展』早稲田大学會津八一記念博物館　2011 年 11 月

【研究分担者の研究成果】
〔図書〕（計４件）
【解説書・資料紹介】
〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋龍三郎　（Takahashi Ryuzaburo）
研究者番号：80163301

(2)研究分担者
中門亮太　（Nakakado Ryouta）
研究者番号： 60612033

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：